

自然的文化財のマネジメントを考える

桂 雄三（文化庁記念物課天然記念物部門／主任文化財調査官）

1. 《3. 11》と私たちの立ち位置

平成23年3月11日東北日本太平洋沖地震（東日本大震災）が起こり、死者行方不明19,386人もの壊滅的な津波被害をもたらした。

震災後様々な復興プランが動き出している。高台への移住、低地での避難タワーの整備、瓦礫を利用した海岸林の整備、震災復興公園構想等々。

手元に、岩手県から提供頂いた陸前高田市の縄文時代から近世までの遺跡の分布と津波の侵入範囲を重ね合わせた地形図がある。今回の津波の侵入範囲を縁取るように分布する遺跡が印象的である。津波被害で壊滅的打撃を受けた市街地の大部分は、縄文時代以降の沖積作用で埋め広められた低地と、近世以降の埋立てで広がった低地に展開してきたことが分かる。

千年に一度ともいわれる災害を目の当たりにして、絶えず心にとめておかねばならなかったはずの、私たちの立ち位置としての風土、そして来し方行く末を再確認することを迫られた思いである。

防災に対する技術が編み出され、移動手段が発達し、情報のやり取りが容易になったとはいえ、私たちの暮らしの基礎が地域固有の風土に根ざしたものであるべきであることを再認識させられた。

2. 日本列島とそこに育まれてきた文化

ユーラシア大陸の東縁に位置する日本では、東から太平洋プレートが沈み込み、付加する地層により列島が成長し、脊梁山脈の隆起を促してきた。太平洋岸では海溝型の巨大地震、内陸部ではいわゆる直下型地震と、地震災害の記録は有史以来枚挙にいとまがないし、沈み込むプレートの圧力は、列島を細かな地形単位に分けている。

さらに沈み込むプレートがもたらす水により溶融した岩石が、火山として噴火するとともに、豊富な温泉や火山湧水といった恵みももたらしてくれる。

一方、東アジアモンスーンに規定され四周を海に囲まれた風土は、鮮やかな四季の移ろいととも、豊富な降水量による上流域での活発な浸食作用と下流域での堆積

作用をもたらし、細かな地形単位にさらに変化を与えるとともに、多様な土壌の形成を促してきた。地域ごとに異なる土壌は、多様な植物相そして、それに対応した多様な動物相をもたらし、われわれヒトもその一員である。

寺田寅彦の随筆「日本人の自然観」に、『人類もあらゆる植物や動物と同様に長い長い歳月の間に自然のふところにはぐくまれてその環境に適応するように育て上げられて来たものであって、あらゆる環境の特異性はその中に育って来たものにとえわずかでもなんらか固有の印銘を残しているであろうと思われる。』と言う件がある。

好むと好まざるとによらず、古来私たちは、地震、噴火、気象災害を始めとした自然の影響を強く受け、あるいはやり過ごす中で、地域で歴史を重ね文化を醸成してきた。我々は、こうした仕組みを知ることが必要で、過去の歴史の中での自然とのつきあい方に学びながら、現在をそして将来の暮らしぶりを選択してゆくことが肝要かと思う。

我が国では、90年間にもわたり、古生代の化石から集落の伝統的な祭りまで、およそ森羅万象と言って良いような多様な対象を文化財として保護してきた。文化財は、地域で自然と共に生きてゆく知恵、風土や土地柄に対する知恵や知識を呼び起こすための拠となるものとして、保存されてきたのではないか。

言い換えれば文化財は、こうした仕組みの節目にあたる事物を保存することにより、背後に潜む知恵や知識を継承する拠として機能すべきものと考えられる（図-1）。

また一つの文化財は、切り口により多彩な表情を見せし、多様な文化財たちは、時空を越えて複雑に絡み合い、様々なストーリーに展開する。天然記念物もこうした文化財たちの一類型として、単に学術上貴重な自然物や自然現象を保存するだけでなく、自然と人との関わり方や生業、暮らしに関わる事柄をも伝えてくれる。

3. 自然的文化財のマネジメント

3. 11の大津波の際に再認識させられたのは、私たちの暮らしが、過去も現在もそして将来も、自然環境（風土）の圧倒的な影響の下でしか展開し得ないということ

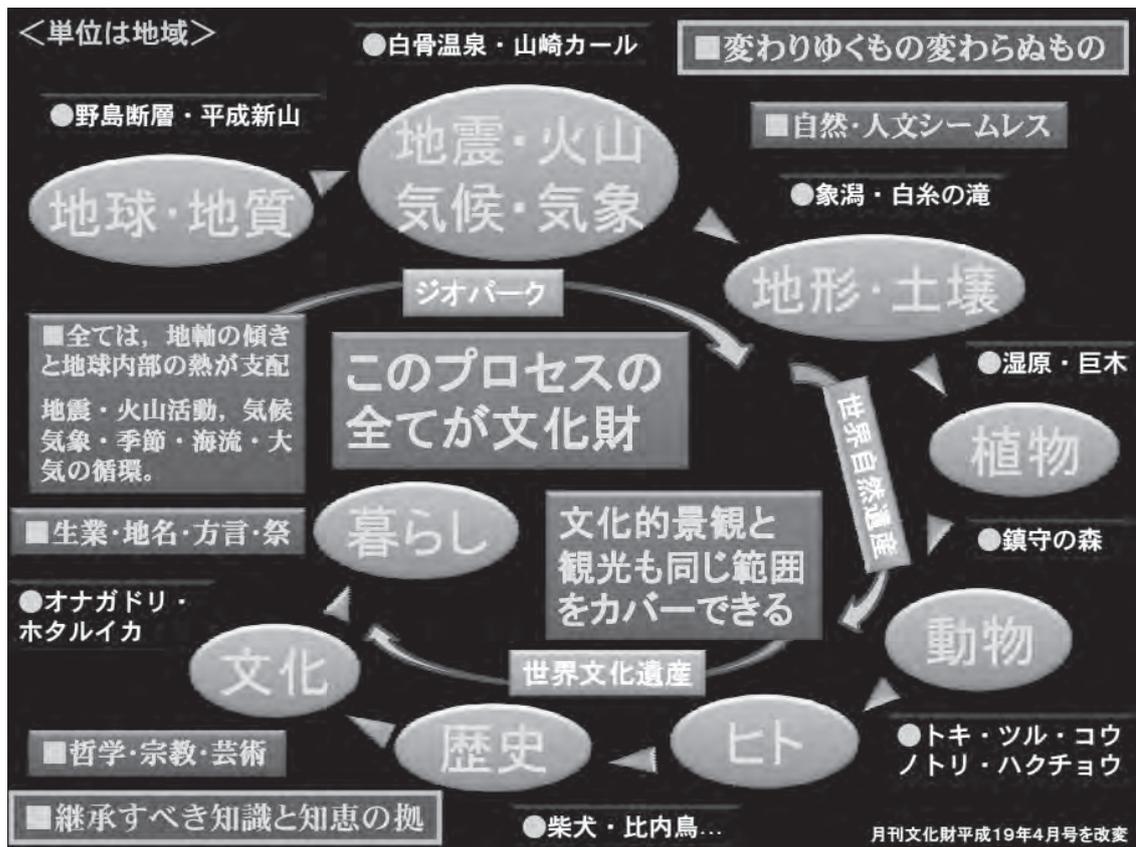


図-1. 私たちの暮らしとその仕組みを伝える文化財たち

であろう。また津波により惹起された原発事故は、産業革命以降突き進んできた、様々な分野での分業化と分析的な動きと専門の分化、それにより失われた総合的視点の欠落への警鐘でもあった。

自然的文化財の定義や、マネジメントというテクニカルな事柄に入る前に、まずは地域にある文化財個々のもつ多面的意味合いの理解が前提となるべきであり、その際、私たちがとるべきスタンスは、以下のようにまとめられるだろう。

- ①自然は文化の醸成に影響を及ぼす。
- ②自然と文化の相互作用の時系列として歴史が展開する。
- ③地域の成り立ちや仕組み（知識&知恵）は、文化財たちの物語で了解できる。
- ④地域の物語を共有し、他地域の物語から学び尊重する。
- ⑤文化財を保存しその意味を理解し、日々の暮らしと地域の将来の選択の拠とする。

そもそも、地域では、様々な個別文化財（未指定も含む、地域資源でも良いかも知れない）が境目なく存在しており、有機的に結びついている。個々の文化財のもつ意味と、それらが相まって示される物語の意義は、暗黙の内に了解され、残し活かされてきた。

こうした地域で継承されてきた物語とそれに基づく地域のあり方の再認識の重要性の喚起こそが、文化財の総合的把握という考え方の提案の動機であり、歴史文化基本構想の根本精神である。これはまた、文化財のマネジメントが、単に個別文化財の取扱マニュアルでもなく、従来型の文化財の保存活用の枠を越えて、文化的景観、世界遺産、ジオパークや本来の意味での観光、地域振興とも通じるという視点の提案でもある。

グローバリズムの名の下に、搾取と格差を科学技術や虚構といってよいシステムにより、カモフラージュし突き進んできた近代という時期の評価と進むべき方向。文化財たちは、その道行きを指し示してくれるし、「自然的文化財」という考え方が、ともすれば忘れがちだった、私たちの暮らしの仕組みをリマインドしてくれるものならば、そのマネジメントは、単に文化財の保存活用といった枠から飛び出して、大きな力を持つことになるはずである。また、文化財（群）は保存することが目的ではない。その背後に秘められた物語（知恵）を伝えることが目的であることを忘れてはならない。

【文献】

桂 雄三 2007「天然記念物のめざすもの ―文化財保護行政の現場から―」,『月刊文化財』No.523, p.p.4-9